

ADL 能力回復の効率性とエネルギー充足率の関係性

吉田 拓¹⁾ 鶴井 慎也¹⁾ 石森 卓矢¹⁾ 腰塚 洋介¹⁾ 星野 郁子²⁾
渡邊 美鈴²⁾ 美原 盤³⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション部

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 栄養課

3) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経内科

[はじめに]回復期リハビリテーション(リハ)病棟に求められる機能は、効率的な ADL 能力の改善である。一方、ADL 能力の改善には栄養摂取量の充足が重要であると報告されている。しかし、ADL 能力のプラトーおよびプラトーに達するまでの期間とエネルギー充足率に関する検討は十分に行われていない。今回、脳卒中患者の ADL 能力回復における効率性とエネルギー充足率の関係性について検討した。

[対象]平成 29 年 5 月から令和元年 5 月までに回復期リハ病棟に入院した初発脳卒中患者のうち、入院時 ADL 自立、経口摂取困難、入院中の状態悪化、死亡、および入院期間 30 日未満の症例を除く、109 例を対象とした。

[方法]入院時の目標エネルギー量、食事提供量、喫食率により算出したエネルギー充足率が 80%以上を良好群(73 例)、80%未満を不良群(36 例)に分類した。両群間において入退院時の FIM-M 合計、FIM-M 利得、入院日数について比較した。さらに、FIM-M 合計と下位 13 項目それぞれにおいて、プラトーに達するまでの期間を時間変数、良好群と不良群を従属変数とした Kaplan-Meier 分析とログランク検定を行った。なお、本研究は当法人倫理委員会の承認を受けて実施した(受付番号 106-04)。

[結果]両群間において入退院時 FIM-M 合計、FIM-M 利得に明らかな差はなく、入院日数は良好群が有意に短かった($p < 0.05$)。プラトーに達するまでの期間は、FIM-M 合計、FIM-M 下位項目の清拭、浴槽移乗、移動、階段において良好群が有意に短かった($p < 0.05$)。

[考察]エネルギー充足率は ADL 能力のプラトーに対して影響を示さなかった。一方、エネルギー充足率が良好な症例は ADL 能力がプラトーに達するまでの期間が短かった。ADL 能力を効率的に改善するためには、リハ訓練のみならず管理栄養士による適切なエネルギー管理が重要である。